

(事例報告)

聴覚障害のある乳児及び保護者に対する早期からの聴覚的・発達の援助

— 1歳未満の1事例を通じて —

佐藤 正幸・小林 倫代・寺崎 雅子*

(聴覚・言語障害教育研究部・小田原市立病院*)

要旨：本報告では、新生児聴覚検査事業実施要領によって聴覚障害があると診断された乳児に対する早期からの援助について、1事例を通して考察した。その援助には、聴覚の評価、補聴器のフィッティングに関わる聴覚的援助、運動及び行動を含めた心身全体の発達の評価に関わる発達の援助、保護者からの相談に関わる保護者援助の3つが含まれた。その結果、聴覚的援助は、聴覚の評価における聴性行動の見方、補聴器の装用に対する援助、発達の援助は子どものあらゆる行動の捉え方を保護者とともに確認し、発達を促すような助言をすること、保護者援助においては聴覚障害の理解及び子どもへのわかり、コミュニケーションの仕方に関する助言が重要な要素としてそれぞれ検討された。

見出し語：新生児聴覚検査、乳児、聴覚障害

1 はじめに

厚生省（現 厚生労働省）が平成12年（2000年）10月1日に施行した「新生児聴覚検査事業実施要領（以下 新生児聴覚検査）」により耳鼻咽喉科のみならず関係するあらゆる医療機関（例えば、産科、小児科など）に新生児に対する聴覚検査を委託してからは、出生と同時に聴覚検査が可能となり、自治体によっては公的な援助のもとで広く行っているところが見られるようになってきた。従来、乳幼児期におけるきこえの問題については、1歳半健診もしくは3歳児健診さらには、通園している幼稚園の担任教諭からことばの遅れなどを指摘されて、聴覚障害が発見されることが多かったが、このような新生児聴覚検査によって出生後まもなくして、すなわち新生児期（出生後 第4週まで）に聴覚障害の診断がなされるようになった。そのため、1歳未満で聾学校の乳幼児教育相談や当研究所の教育相談センターを訪れるケースが見られるようになった。聴覚障害のある乳児に対する相談を行っていく中で、乳児期における聴覚の評価基準が多種多様であり聴力レベル（閾値）の確定が難しいこと、乳児期の聴覚の発達から見た補聴器のフィッティングのタイミングの難しさ、そして我が子が聴覚障害であることについての保護者の不安に対する援助など様々な問題が生じてくる。

そこで、聴覚障害のある乳児に対する教育相談において、いかなる聴覚的援助を行うべきか、またその保護者に対する援助はどのようにあるべきかなどについて検討する必要がある。

本稿では、新生児聴覚検査で聴覚障害と診断された1事

例を通じて、聴覚の評価（注1）、補聴器のフィッティングの聴覚的援助、運動及び行動面を含めた全体の発達の援助及び保護者からの相談に関わる保護者援助について検討を行った。

2 事例のプロフィール

平成12年（2000年）10月生。平成14年6月現在1歳8ヶ月の女児。仮死状態で出生（在胎39週5日、出生時体重2968g）、アプガー値（注2）3点であった。そのため、挿管の上、産科開業医より総合病院に転送された。その後、生後7日、8日、1ヶ月の新生児スクリーニング（自動聴生脳幹反応検査：AABR：Automated Auditory Brain Response）で無反応、生後3ヶ月の聴生脳幹反応検査（ABR：Auditory Brain Response）でも無反応とされ、両側難聴と診断された。なお、家族歴において聴覚障害のある者はいない。当研究所教育相談センターには生後5ヶ月時にきこえとことばの相談を主訴として来所した。また、小児科医より出生時の状況から重複障害の可能性も指摘されたことから、発達の観点について援助を行うことも必要とされた。

3 事例に対する聴覚的援助及び発達の援助

本事例に対して、聴覚的援助及び発達の援助を行った。聴覚的援助としては、教育相談時における聴覚の評価、補聴器のフィッティング、補聴器活用のための助言であった。一方、発達の援助は、教育相談時の本児の全体的な行動の様子を記録し、子どもの捉え方を保護者とともに確認し、

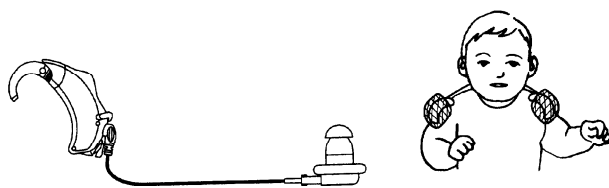


図1 ベビー用補聴器
(リオン株式会社カタログより
掲載にあたってはリオン株式会社の承諾を得た)

発達を促すような助言をすることであった。その経過を以下に示す。

1) 初回相談（平成13年3月16日（5ヶ月））

<聴覚的援助>

本児と保護者は、聴覚の評価及び補聴器のフィッティング、ことばの指導方法を主訴として初めて来所した。条件詮索反応聴力検査（COR：Conditioned Orientation Response Audiometry）による聴覚の評価を行った。各周波数（250Hz～4000Hz）ともに90dBまたは95dBで眉毛を動かす、音源を探すような様子を見せ、また音が止むと下を向くような行動が見られた。上記の結果を基に右耳のみ試験的にベビー用補聴器（RION HB-79PX）（図1）を装用させたところ、顔の表情が変わり、母親のよびかけに応じ、笑う仕草が見られた。

<発達の援助>

発声は少なかったが、目の動き、手の動きなど着実な発達が見られた。保護者は、「腹這いの姿勢はすぐにいやがる」と言っていたが、腹這いにして目の前に玩具を置くと、何度も上体をあげ、身体や足をよく動かす様子が見られた。家庭ではやわらかい布団の上で腹這いをさせていたようなので、やや固めの絨毯の上で腹這いにさせ、眼前に玩具を置いて遊びを誘うように保護者に助言した。腹這いに慣れると、この先、お腹を支点にぐるぐる回ったり、玩具に近づこうとしても後ろに下がってしまったりする動きが出てくるが、そうやって動き方を学んでいくことも伝えた。

2) 第2回来所相談（平成13年4月17日（6ヶ月））

<聴覚的援助>

CORによる聴覚の評価を行った。今回、初めて周波数全体において聴覚の評価ができ、そのオーディオグラムを図2に示す。

1000Hz 90dB近傍でこっと笑い、CORで使用されている玩具の動きを注視し、喜ぶ様子が見られる。2000Hz、85dBで眉毛を動かす、眉間にしわがよる表情が見られ、音が止むと元の顔の表情に戻る。4000Hz、80dBで眉毛を動か

す。500Hz、80dBで「あれー」という表情を示し、音源を探している様子が見られた。250Hz、70dBで振り向く仕草を見せたり、だっこしている父親の顔を覗き込んだりする様子が見られた。

試験的に前回と同じく、ベビー用補聴器を右耳に装用させた。補聴器を通した音の反応についてはいくつかの音に関心を示すような様子であった。特に、太鼓、がらがら、ゴム製の人形が出すチュウチュウという音に笑う、振り向くなどの様子がみられた。がらがらは自分で鳴らして喜んでいる様子であった。このような反応の良さを受けて、今回よりベビー用補聴器を右耳のみの試用のために貸し出し、イヤモールドを作成するまではイヤチップを使用することにした。右耳に補聴器を装用させた理由は、ヘッドホンによる聴力検査が不可能で左右それぞれの聴力レベルが確定できないこと、また、音に対して振り向く際、右耳をみせることであった。

<発達の援助>

前回に比べると、体幹がしっかりしてきた。大きく反り返ってものを見たり、寝返りをしたりするなど、運動量も増えてきている。玩具を提示すると、よく見てすぐに手を伸ばし、口に持っていくことや、抱いたときに大人の顔をいじるという動作が見られる。このような運動量の増加や目と手の協応の発達の様相について保護者と確認した。

また、腹這いでボールに触って遊んでいるときに、20～30cmほど離れたところから、キティ人形をキューとならすと、遊びを止めてキティ人形を見る様子も見られた。

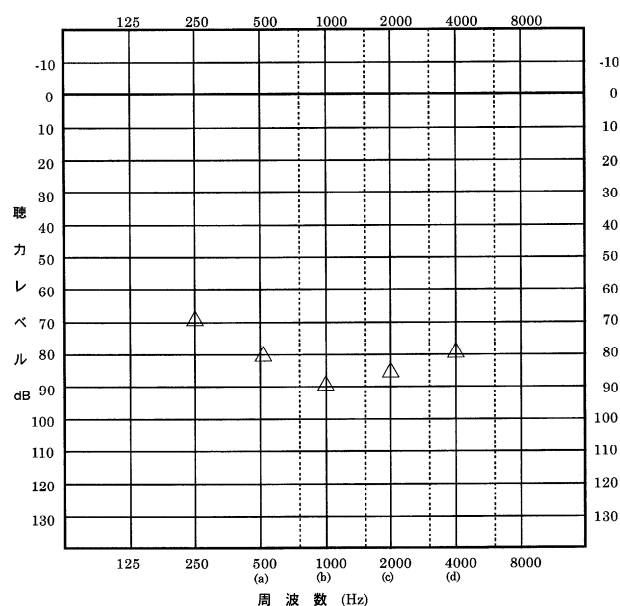


図2 オーディオグラム（6ヶ月時：COR）

3) 第3回来所相談（平成13年5月25日（7ヶ月））

＜聴覚的援助＞

CORによる聴覚の評価を行った。音が鳴っているのがわかると同時に「あっ！」「うっ！」「あー」とさかんに声を出す。聴力レベルにおいては250Hz－55dB、500Hz－70dB、1000Hz－80dB、2000Hz－80dB、4000Hz－80dBであった。補聴器を試用しはじめてから約1ヶ月がたっているが、音の存在がわかりかけているのか、音の出る玩具を欲しがることが見られた。この日、耳鼻科医の立ち会いのもとイヤモールドを両耳作成するために耳の採型を行った。

＜発達の援助＞

手足を良く動かすようになり、腹這いの姿勢で腹部を軸にして回る動きも見られるようになってきている。足先でのけりはないが、手の平で床を力強く押し、上体を高くあげる様子も見られる。座位も安定してきているが、長時間の座位保持は難しい。

玩具の扱い方は、嘗めるほかに、玩具で床を繰り返したたく行動が見られる。また、片方の手に持っている小さい玩具を他方の手に持ち替えることもしていた。

発声が増え、声を出して（「あー」と言って）人を呼ぶような様子も見られている。また、音源を見たり探したりする行動がはっきりしてきた。

この時期は運動面での発達が著しい時期なので、保護者が抱いている本児にいろいろな姿勢をとらせたり、身体を大きく動かす遊びと一緒に楽しく行ったりすることを勧めた。これらの遊びの中で、バランス感覚を獲得し、身体の使い方を知ることができるということを保護者に助言した。

4) 第4回来所相談（平成13年6月29日（8ヶ月））

＜聴覚的援助＞

CORによる聴覚の評価は、250Hz－60dB、500Hz－65dB、1000Hz－80dB、2000Hz－85dB、4000Hz－80dBであった。このときの反応は前回と同様、音がきこえると「あー」と発声したり、眉毛を動かす様子が見られた。

今回の教育相談の10日前に、総合病院において初めてイヤモールドを装用した。すると、これまで試用のために装用していたイヤチップからイヤモールドに代えたためか、あるいは補聴器のコードが気になり出したためか、装用させるとすぐにはずしてしまう様子が見られた。そこで、本児が遊びに夢中になっているところで筆者が装用させたと約5分間のみ装用することができた。また、補聴器を装用している時には、ものを落としたりしたときの音などをうるさがる様子があると保護者からの報告があったので、最大出力音圧の再調整を行った。

＜発達の援助＞

運動面での成長は、順調である。座位が安定したこと、さらに座位から四つ這いの姿勢にもなる。肘を支えにし、胸を床につけて前進している。また、膝を曲げず、高這いの姿勢になることも多い。

玩具の操作では、嘗めることが少なくなり、手指をよく使っている様子が見られた。ビジーボードを見せて、お母さんと一緒に遊ぶ。お母さんの指の動きをよく見て、まねをする様子が見られた。指を滑らせてボールや筒状のものをまわすこと、指を1本入れて、ダイヤルをまわすような動きをすること、レバーを横に滑らすこと等が保護者との遊びの中で見られるようになった。これらの本児の成長を保護者とともに確認した。

本児がつかまり立ちをし始めているので、保護者は本児を抱えあげて立たせる様子が見られた。親心として立たせたい気持ちは理解できるが、できるだけ四つ這いをたくさんさせて欲しいこと、膝立ちから立ち上がる動作を大事にして欲しいことを助言した。四つ這いや立ち上がり動作は、背筋、腹筋を強くし、脚や腕の協応運動を促し、バランス感覚を高めることになるので、十分に行うことが大切であると伝えた。

5) 第5回来所相談（平成13年7月23日（9ヶ月））

＜聴覚的援助＞

CORによる聴覚の評価は、250Hz－5dB、500Hz－70dB、1000Hz－85dB、2000Hz－90dB、4000Hz－90dBであった。音がきこえると顔をしかめたり、「なんだろう」という仕草を見せたりした。時折、本児を抱っこしている母親の顔を覗き込んだりしているところも見られた。

補聴器の装用においては、まだコードなどが気になる様子ではあったが、玩具などに夢中になっているとき、補聴器を装用させ、自分でボタンを押すと音がでる玩具で遊ばせた。そこで、本児以外の他人が音を呈示するよりも、自分で音を出して遊ぶ方が補聴器の装用状況が安定している様子が見られ、10分近く装用していた。保護者には自分で音を出す機会を多く与えるよう助言した。

＜発達の援助＞

四つ這いで前進し、途中で腹這いになり、両手を同時に動かし前進することも見られる。膝を曲げず、高這いの姿勢になることもある。トランポリンに座位で乗せるとバランスをとろうとする。また自分で高這いの姿勢になり、身体を揺る。その揺れに合わせてトランポリンを揺ると大喜びであった。トランポリンのそばにあった鏡にも興味を示し、鏡に映る自分の顔、下で見ていた保護者の顔と鏡に映る保護者の顔を見比べたりしていた。

箱を開閉して、玩具を出し入れして見せると、本児もまねをして、箱のふたを何度も開け閉めしたり、玩具を出し

入れしたりする。物と物を関係付ける遊びに誘ったところ、本児も興味を示したので家庭でも物の出し入れやふたの開閉などの遊びに誘うよう助言した。

6) 第6回来所相談（平成13年8月31日（10ヶ月））

＜聴覚的援助＞

CORによる聴覚の評価は、250Hz－50dB, 500Hz－60dB, 1000Hz－75dB, 2000Hz－75dB, 4000Hz－85dBであった。音がきこえると「あれ～なんだろう」というような仕草を抱いている父親の方に向け、父親の顔を覗き込んでいた。また、今回はじめて補聴器の装用効果を調べることができた。裸耳の時の聴覚の評価及び補聴器装用時の装用閾値のオーディオグラムを図3に示す。補聴器装用効果を示す装用閾値が全周波数帯域において、40dB～50dBであった。補聴器の装用が父親及び母親の話しかけのある環境で比較的最長い時間（10分以上）になってきたことから、絵本の読みきかせなどをしてお互いに通じ合うこと（例えば、共通の話題でお互いに楽しむこと）を行ったらどうかと助言した。

＜発達の援助＞

おもむつを替えるときに素早く寝返りをして動き出そうとする様子が見られ、運動面での発達が感じられた。腹這いなくなり、四つ這い姿勢で前進している。また、壁やいすにつかまり、立ち上がる動きもスムーズに行っている。いすの上にある物を落として、その行方を見て、しゃがんで取ろうとする動作も見られる。

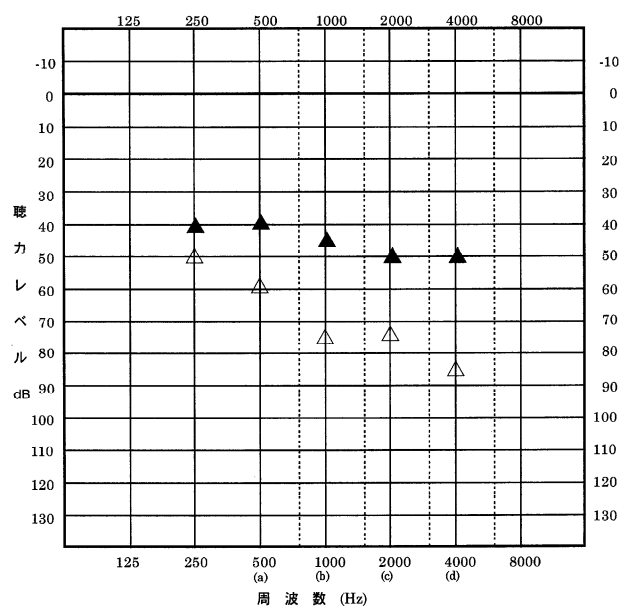


図3 オーディオグラム (10ヶ月時：COR)

註：△は裸耳，▲は補聴器装用時

玩具を持って嘗めることが減り、よだれの出ることも少ない。前回一緒に遊んだコンビカーは自宅でも購入したようだ。その座席の箱機能を利用して、玩具の出し入れを何度も行っているそうである。運動面での成長と物と物を関係づける遊びの定着を保護者とともに確認した。

今回は、指さし（腕差し）をして、自分の欲しい物を要求したり、抱っこで自分の行きたい方向を示したりする様子が見られた。その腕差しをするときに、「あー」という自然な発声がある。このような「動作と同時に出る発声」や腕差しの確認もした。

自宅では四つ這いで階段を上ることを禁止していたようだが、大人が見ている時には禁止しないように助言した。また四つ這いで狭いところ（テーブルやいすの下など）をくぐり抜けたりする行動も止めないで欲しいと助言した。這い上りは腕と腕の協応運動を促し、狭い場所のくぐり抜けは身体の知覚を高めることにつながることを伝えた。さらに自力で立ち上がるようになってきているが、大人が立たせるようなことをせず、四つ這いをたくさんさせることも再確認した。

7) 第7回来所相談（平成13年9月25日（11ヶ月））

＜聴覚的援助＞

今回より聴覚の評価をCORから遊戯聴力検査（Play Audiometry）の方法にかえる。当初、音がきこえると「あれー」というような顔の表情で、同席している母親の顔を見たりする行動が見られたが、次第にPlay Audiometryで用いられている玩具に関心が行き、玩具を動かそうとボタンを押す様子が見られた。音が出ていないとボタンを押しても玩具が動かないとわかると押さなくなり音がきこえると押す行動が見られるようになった。聴覚の評価は、250Hz－55dB, 500Hz－70dB, 1000Hz－75dB, 2000Hz－80dB, 4000Hz－85dBであった。また、コンビカー（動くポンポンと音がする）を動かして何度も音をきいていた。補聴器を装用している時間も15分以上から終日装用（起床時から就寝時まで）になってきた。そこで、補聴器の装用が定着しつつあり、音への関心がでてきていることから、話しかけることだけでなく、一緒に音を感じ遊ぶ（例えば、何か音がきこえたら「何のおとだろう」と共感するなど）ように助言した。

＜発達の援助＞

プレイルームに入ると、まわりを見渡し、やや落ち着かない様子であった。「絵本」「大人の動き」「ままごとの玩具」「コンビカー」と興味は移る。プレイルームにあるたくさんの玩具に目移りしていたようだ。これまで、このような様子は見られなかったため、周囲の状況を見る力がついてきた表れとして保護者と確認した。

運動面では、物につかまっの立ち上がりがスムーズになり、伝い歩きも安定してきている。わずかな時間ではあるが、手を離して立っている様子も見られる。階段の這い登りは、家で頻繁に行っているようで目が離せないと保護者は言っていた。大変さはわかるが、しばらくの辛抱をお願いした。

8) 第8回来所相談（平成13年10月26日（1歳））

<聴覚的援助>

Play Audiometryの方法で聴覚の評価を行う。聴覚の評価に用いる玩具に対する好奇心は旺盛で、こちらが説明をしなくても音が鳴っている時に、ボタンを押すと機関車トーマスが動き、ドラえもののビデオが出てくることがつかめたようである。本児の方から自発的にボタンを押す、前回と比べ、本児にとっての反応が確実であると思われる。そのオーディオグラムを図4に示す。250Hz-65dB, 500Hz-65dB, 1000Hz-65dB, 2000Hz-75dB, 4000Hz-80dBであった。8ヶ月時に装着したイヤモールドが本児の成長とともに小さくなり、補聴器装着時にハウリングが生じるようになってきた。イヤモールドは乳児期にあつては遅くとも6ヶ月毎に更新する必要があることを説明した。

<発達の援助>

ドアについているマグネットに対して、「ウー」と言って腕を伸ばし、「とって欲しいこと」や「つけて欲しいこと」を要求していた。自分でも付けたり、外したりを繰り返し、さらにマグネットを投げたりもしていた。

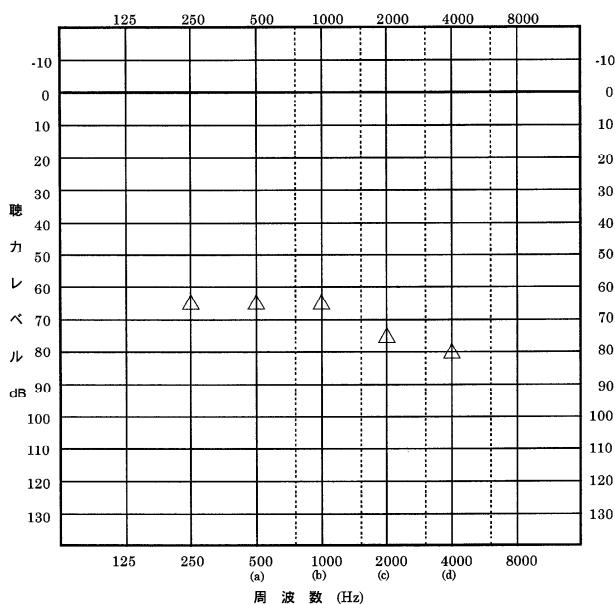


図4 オーディオグラム (1歳時: Play)

座位から四つ這い、四つ這いからつかまり立ち、伝い歩き、カタカタを押しながらの歩行と動作がスムーズに変換できるようになってきている。わずかにつかまりながら、しゃがんだり、立ち上がったたりする動作もする。マグネットで遊んでいるときには、両手を離して、10秒程度立っていることもできた。このような運動面での成長を保護者とともに確認した。

運動面での発達は順調であるが、発声は少ないように感じられる。家では「たくさんおしゃべりをしている」と保護者は、言っているが、来所中には「ウー、ウー」「ブー」という発声が聞かれたのみであった。

「まだ、歩かないんです」という母親の発言があった。現在の様子から見て、歩くことは時間の問題で心配なこと、運動的には歩くまでに背筋や腹筋の筋力をつけること、脚や腰の使い方を学ぶ必要があり、それには四つ這いや自分で立ち上がることの経験をたくさんする必要があることを伝え、焦らないように助言した。

9) 第9回来所相談（平成13年11月16日（1歳1ヶ月））

<聴覚的援助>

相談をはじめて5分ほど後に母親が本児の両耳に補聴器を装着させる。しばらく補聴器をいやがらず装着し、いろいろな音遊び（木琴、太鼓など）をした。しかし、相談の時間帯が午後で、少し疲れたのか眠そうな様子を見せたため、聴覚の評価は行わなかった。そこで、補聴器の装着によって耳（聴覚）が疲労することもあり得るので、本児が疲れた様子をみせた時は無理をしないで補聴器の装着を中止しても構わないことを助言した。

<発達の援助>

シールやガムテープを貼ったりはがしたりする様子から、指先の細かい動きがスムーズになってきている。ボール投げは、前回より遠くへ、力強く投げられるようになってきている。「ちょうだい」という言葉掛けで、ボールを転がしたり、投げたりすることを楽しんで行っている。顔を傾けて「ネー」という姿勢をとったり、鏡に映っている自分の姿を見てほえんだり、鏡に映る母親に向かって手を振ったり、近しい大人への執心や親しみを表す様子が見られる。このようにやりとり遊びをしたり、人に対して親しみを示したりする成長を保護者とともに確認した。

運動面では、足腰がさらにしっかりし、手を離して4～5歩歩くことができるようになってきている。玩具を手にとって、何にもつかまらず数秒立っていることもできる。

言語面では、以前に比べ発声が増えてきていて、イントネーションのある発声や、発声とともに指さしをする等の様子が見られた。

母親の話では、食事は自分でスプーンを持って食べたが

るので、こぼすことが多いがやらせているということであつた。母親は食事場面で周囲を汚してしまうことに不満を感じているようであつたが、手づかみで触ったり、フォークでさしたりすることで、見たものと感触の関係を学ぶ学習をしていることを伝え、汚れることに対しては、シートを敷く等の対処でしばらくは我慢するようにお願いした。

10) 第10回来所相談（平成14年1月16日（1歳3ヶ月））

<聴覚的援助>

聴覚の評価における本児の状況が安定してきたことから、今回より、左右別々の聴力レベルを知るために、当研究所に新規に導入された乳幼児補聴器フィッティングラインシステムの一部であるインサートイヤホンを用いた方法で聴覚の評価を行った。そのオーディオグラムを図5に示す。音がきこえると、音源を探すのか、後ろを振り返ったり、自分の耳を指す仕草が見られた。聴力レベルは全周波数帯域で55～70dBの間であつた。

いろいろな音が出る玩具（木琴、鉄琴、太鼓など）で遊ぶ。最初はランダムにたたいているが、徐々に自分の興味のある玩具のみをたたくような行動が見られるようになってきた。玩具をたたくことによって玩具の音をきき分けているようである。この「音のきき分け」に基づいて、聴覚をいかに活用しているかについて助言した。

<発達の援助>

成長はめざましく、一人歩きが可能となり、滑り台の階段も上手に登り、滑りおりて楽しむことができた。

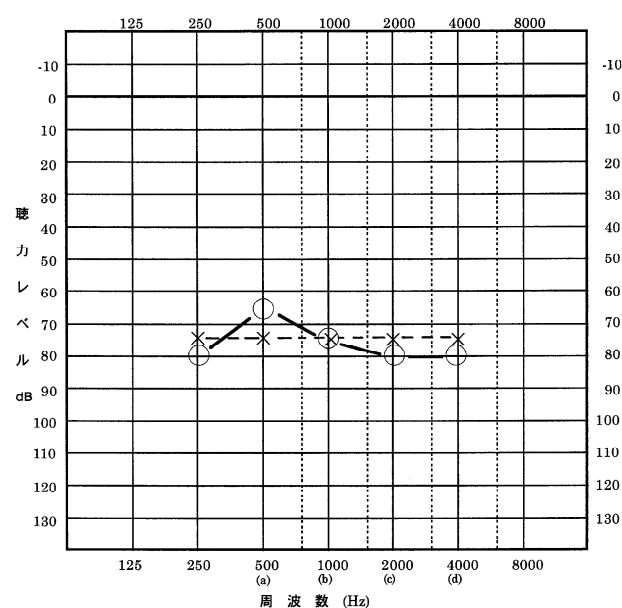


図5 オーディオグラム（1歳4ヶ月時：インサートイヤホン）

ボールを相手に向けて転がしたり、受け止めたりというやりとりができ、それを楽しんでいる。大きなボールを転がすと、ボールを見ながら怖がって逃げるが、ボールで追いかけて欲しいようなそぶりを見せるなど、人を意識した追いかけてこのようなことも楽しめる。

みかんの玩具を取り出して、皮を向こうとするそぶりを見せたり、クレヨンでなぐり書きをしたりする。このような身の回りにあるものの用途を理解しはじめていることを保護者と確認した。

11) 第11回来所相談（平成14年2月20日（1歳4ヶ月））

<聴覚的援助>

数日前、高熱を出したためか閾値の上昇（聴力の低下）が見られた。聴力レベルは全周波数帯域で65dB～80dBの間であつた。補聴器を装用すると自分の声がきこえてくるためか発声が増えているようである。聴力の変動がみられたため、聴覚の管理について助言を行った。

<発達の援助>

滑り台は、本児のお気に入りの遊具のようで、プレイルームでは滑り台を中心にしながら動いた。

みかんの模型を手渡すと皮をむくような仕草をし、食べる真似を筆者がすると同じ様にみかんの模型を口に持って行ってしゃぶってみたり、イチゴの玩具をチューチュー吸ったりする様子が見られ、大人の模倣やテーマ遊びの芽生えが感じられた。このような遊びが「ごっこ遊び」に発展することを伝え、保護者も一緒に楽しんで遊んで欲しいと伝えた。

発声する回数は少ないが、意味のある、タイミングのあった発声が聞かれている。何かに気がついたとき、「おー」といいながら指さしをする様子が見られた。また、大人の頼む言葉を理解してその通りに行動する様子（「ゴミを捨ててきて」という親の依頼を実行し、できると手をたたく）も、家では見られるという。

4 保護者援助

来所した当初、父、母ともに本児に聴覚障害があることを受け止めており、聴覚障害のある我が子の子育てについては前向きな姿勢を示していた。しかしながら、どの程度の聴力なのか、また、全くきこえない状態なのかは、具体的には説明を受けておらず、最初に担当者に質問したことは「どのくらいの聴力なのでしょう。」であつた。これに対して、担当者は聴覚の評価を行ったあと、本児のきこえの状況を理解してもらう意味で評価において得られた聴力閾値と同じ音圧の音を聞いてもらい、体験してもらった。その際、具体的にどのような音がよくきこえて、どのよう

な音がききづらいのではないかなというようなことの説明を行った。

さらに、聴覚障害があるということで、どのように本児にかかわってよいのか要領を得ないところも見られたので、子育て及びコミュニケーションの両面におけるかかわりについての助言も行った。

このような状況において保護者援助にあたっては、保護者に負担がかからない程度で本児の日常の様子をどんなに小さなことでも記録をしてもらうようお願いし、それを基に担当者である筆者らが助言などを行った。これらの記録はほぼ毎月1回の教育相談の際に提出してもらった。以下に本児の日常の様子に関する記録の一部及び担当者が助言した記録について記す。これらの記録は教育相談の日と次の教育相談の日までの間の記録であり、また本児の日常生活における保護者への助言であるので、前項の聴覚的援助及び発達の援助の項とは別項にした。

1) 平成13年4月16日～5月24日（6ヶ月～7ヶ月）

<保護者の記録>

「午後8時20分頃、補聴器をつけました。音の出る玩具で遊びました。音を鳴らすとそちらの方を見て玩具を取ろうとします。私たちの声もわかっているようです。」

「「おはよう」と声をかけ、玩具で遊びました。音を鳴らすとそれに反応し、玩具を取ろうとします。」

「音がなるとまゆげをびくっと動かします。」

「ピアノで遊びました。音には反応をしているみたいですが、びっくりしたらしくきょんととしていました。」

「補聴器をかけると声を出します。「ハイ」と言ったり、にこにこ笑ったりします。」

「おばあちゃんとたくさんお話をしました。「アーアー」とか「プー」とかたくさんおしゃべりをします。」

「たくさん話しかけましたがキョトンとしています。」

「玩具を手を持つと、話しかけてもあまり反応がありません。呼ぶとたまに目があいます」

<担当者の所見及び助言>

このころの記録を見てみると、来所当初、どのくらいの聴力なのだろう、きこえていないのだろうかという不安を表出していたためか、補聴器を装着して音が入っているかどうかに関心がある記述が多く見られた。また、これらの記録より本児が「音の存在」に気づきはじめ、保護者の方としても「音がきこえる」という場面を通して「場の共有」をしようとしているところが窺える。

またその反面、本児に話しかけているようであるがキョトンとしている、きこえているのかどうか不安であるというようなコミュニケーションまでに至らない記述が見られた。

これらの記述から、保護者が本児と音声言語でコミュニケーションをとろうとしている様子が見られるが、筆者らの方から、音声言語だけがコミュニケーションの方法ではなく目を合わせることもコミュニケーションの1つであること、かつ本児の行動（玩具の音がきこえやすい、「あー」「ぶー」などの発声発語と一緒に遊びたいということ）をどのように捉えればよいかを助言した。また、「音声言語にこだわることのない意志の通じ合い」から始めることについても助言した。

2) 平成13年5月25日～6月28日（7ヶ月～8ヶ月）

<保護者の記録>

「テレビはあまりみないでわたしたちの声によく反応しています。」

「補聴器をかけていると声がよくでるようになってきました。」

「最近は一人でいてさみしくなると大声で泣くようになってきた。声を出していると様子を見に来るのが分かってきたみたいだった。」

「「まんま」「おいしいね」との話しかけには反応しています。」

「机をたたいたり、玩具の音には反応しますが、声にはあまり反応がありません。」

<担当者の所見及び助言>

本児にとってどのような音がわかりやすいのかがつかめてきているような記述が出てきた。しかし、本児が補聴器を装着しないことも時々あり、親が焦りを示す記述（例えば「音声にはあまり反応がない」など）もあった。補聴器を装着するかしないかの問題ではなく、補聴器を装着したときの体験、していない時の体験の両方が本児にとって重要であることを助言した。また、音に対する行動にこだわらず、生活全般にわたって記録をしてみたらどうかと助言した。また、大声で泣いて注意を引くという行動も本児がコミュニケーションをとろうとしている1つであることを話した。

3) 平成13年6月29日～7月22日（8ヶ月～9ヶ月）

<保護者の記録>

「お風呂で体を洗っている時、後ろから呼ぶと私の方を振り返って見ました。うれしかった！！」

「テレビで「おかあさんといっしょ」を見ながら一緒に歌って手を持って踊ってあげるととても喜び、自分でも一生懸命手を動かしていました。」

「テレビに集中していたため、いつもより長くつけられました。たまに手をバタバタ動かしています。」

＜担当者の所見及び助言＞

前回の助言を受けて、本児の音に対する行動に関する記録のみでなく、家族とのやりとり、玩具遊びなどの記録が見られた。特に、元気で活発に動き回る記述が見られることは本児の運動面での発達が順調なことが窺える。また、「うれしかった！！」という記述が随所に見られることは、保護者が本児へのかかわりになれ、少し余裕が出てきたように思われる。このことは担当者として保護者の成長を認めてあげ、評価して保護者に伝えることが重要であると考える。

4) 平成13年7月23日～8月30日（9ヶ月～10ヶ月）

＜保護者の記録＞

「犬にとっても興味があるらしくおいかけています。犬も吠える声にたまに反応しているようです。」

「本を見て、テレビで歌がはじまるとぱっとテレビを見たりします。」

「お風呂の中で目があった時、何回か呼ぶとじーっと私の顔を見ている。自分が「(本児の名前) ちゃん」だということがわかってきたのかな。」

「補聴器をつけて遊んでいる時、たまに音を出すとうるさいのか補聴器をはずしてしまいます。」

「補聴器をつけるととたんにおとなしくなります。つけていない時はすぐおしゃべりをしているのですが。」

「自分の意志をすぐく表わすようになってきて、嫌なことがあると怒ったり、外に行きたくなると外の方を指さしたりします。」

＜担当者の所見及び助言＞

当初より、一連の記録の中に、お風呂での様子を記したものが多く、それは、お風呂という狭い空間の中で保護者と本児と一緒に体を洗ったりして場の共有がなされていること、また空間の狭さからくる音声の共鳴で聴覚に障害のある子どもが音に気づくことから、毎日の生活の中でお風呂は保護者と本児がコミュニケーションするための重要な空間であることが考えられる。

さらに、本児が補聴器を装着しているとき、きこえているかどうかを確認したいがために音を出すことに意識しすぎているところが見られた。担当者の方から、このことについて補聴器を装着している、または装着していない時も同じようにかかわるなど、必要以上に神経質にならない方がよいと助言した。また一方では、補聴器が装着できなくて不安を募らせる記述が多い。それよりも本児にとって補聴器を装着している時としていない時の体験（例えば、装着するとどんな音がきこえてくるのかなど）、それ以外にも顔をあわせる、人と顔を合わせるなどの様々な経験の積み重ねも必要であると助言した。

要求を指さしなどで示したことについては、そのまま本児の指示通りするのではなく、本児の要求を言葉で必ず返してあげる（代弁する）ことも重要であると助言した（例えば、りんごを指さしたら「りんご ちょうだいね」「りんごがほしいの？」というように）。

5) 平成13年8月31日～9月24日（10ヶ月～11ヶ月）

＜保護者の記録＞

「テレビに少しあきると玩具で遊び、好きな歌やキャラクターが出てくるとじーっとテレビを見ている。玩具の音を鳴らすとたまにぱっと玩具の方を見ます。今日、左耳はすぐに外してしまいましたが、右耳はずっとつけていました。「きゃーっ」とか大きい声をたくさん出しています。」

「後ろから「(本児の名前) ちゃん」と呼ぶと振り返って私の方を見ました！」

「お腹をちょこちょくすぐると声をだして笑います。表情がとても豊かになってきました。」

＜担当者の所見及び助言＞

今回は、補聴器の装用についての記録が少なくなり、様々な場面で経験を積み重ねていく記録が多く見られた。中でも保護者が本児の表情を読みとって行動していること、つまり本児の表情からいかに本児の気持ちをとらえているかを窺わせるような記録が出てきたことは、保護者にとって本児とのコミュニケーションに余裕が出てきたことを思わせる。このことについて保護者に話し、保護者が本児の表情から本児の気持ちを捉えていることを認め、このような対応の大切さを助言した。

6) 平成13年9月25日～10月25日（11ヶ月～1歳）

＜保護者の記録＞

「今日はお友達と遊びました。同じくらいの年に生まれた子が5人集まりました。まず、みんなで遊ぶことはしないで1人ずつ好き勝手に遊んでいました。(本児の名前) ちゃんは1人で「フーフー」おしゃべりしてとても楽しそうでした。」

「今日は玩具で遊びました。最近はお車の玩具を押して歩けるようになったので得意気に歩いています。今日初めて「ま」といいました。」

「みかんととても興味があるようで丸ごと手に持っては少し口に入れたりしています。今日もたくさん動き回っています。最近、物を持ては私に「んー」と言いながら渡してくれます。「あんがと」と言いながら頭を下げると手をバタバタしてとても喜びます。」

「今日は「いないいないばあ！」の本を読んであげました。すぐに飽きてしまったようで少しすると他の物で遊びだし、また少しすると本の方をみたりしています。見てい

る時はじーっと本をみています。」

＜担当者の所見及び助言＞

友達という保護者以外の人々と接する機会も多くなり、保護者も本児は聴覚障害があるということを意識させることなく他人と関わらせている様子がみられる。また、みかんのやりとりについてはそれが遊びであっても人と人の関係作りで大事なことでと助言した。またお礼をいわれ喜ぶことは本児にとってよい体験をしたと考える。さらに本にすぐ飽きてしまい、他の物で遊ぶということは性格が飽きっぽいということではなく、いろいろな物に興味をもち好奇心が旺盛であるということを手伝った。

7) 平成13年10月26日～11月15日（1歳～1歳1ヶ月）

＜保護者の記録＞

「今日はいつもより大きな声でおしゃべりをしています。「キャー」や「ワー」などたくさん声を出しています。自分の声がかきこえるのがうれしいのでしょうか」

「最近ごはんの時には「んまんま」と言うようになってきました。今日もとても大きな声でおしゃべりをしています。補聴器をつけた時もたくさんおしゃべりをするようになってきました。」

＜担当者の所見及び助言＞

発声・発語に関する記録が多く見られた。ちょうど発声して遊ぶ時期に入ったことが考えられる。また、食事の際に「んまんま」と発声することは本児が自分の今の状況を理解していることなど、本児の行動の見方について助言した。

8) 平成13年11月16日～平成14年1月17日（1歳1ヶ月～1歳3ヶ月）

＜保護者の記録＞

「いろいろな方向を指さしながら「んー」と言っています。」

「玩具や本などで1人で夢中になっている時は声はかけず、1人で遊ばせているのですが、声をかけた方がいいでしょうか。（本児の名前）が何か言った時は答えるようにしています。」

「（本児の名前）ちゃん専用のキティちゃんのイスにどかっとなってえらそうにテレビを見ています。たまに大きな声で「あー」とか「まー」とか「んー」とか言うので同じように言い返すと同じように言い返してきます。」

「「あー」とか「まー」や「んー」と大きな声でおしゃべりをしています。（本児の名前）ちゃん」と呼んでも反応がありません・・・きこえているのでしょうか」

＜担当者の所見及び助言＞

一部で補聴器及びきこえに関する記録はあるものの、全体的に本児の行動、遊びに関する記録が目立った。夢中

なっている1人で遊んでいる時のことばかりについては、担当者の方から、どんなことに興味を持って夢中になっているのかを見ておく必要はある、ことばかりについては特に必要はないが、保護者の方で手が空いて一緒に遊びたくなったときは「一緒に遊ぼう！」とことばかりするとよいと助言した。一方では名前を呼んでも反応がないという記録も見られ、これまでは何回も反応が見られただけにショックを受けているような様子であった。このことは周りの音環境（周囲が騒がしいなど）及びその時の体調によって異なることもあると助言した。積み木遊びについては大人も一緒に楽しむところを見せるとよいと助言した。

9) 平成14年1月18日～2月19日（1歳3ヶ月～1歳4ヶ月）

＜保護者の記録＞

「外に出ると歩けるのがうれしいらしくあちこち歩いていってしまいます。自分で思うところにいけないと床に座り込んで泣きます。」

「今日、ママの方のおじいちゃん、おばあちゃんが遊びにきました。たくさん遊んでもらい帰る時、外まで見送りに行き、車で帰ってしまうと大泣きしてしまいました。」

「馬の乗り物がお気に入り、指さしながら「んーんー」と言い、乗せてあげると大喜びします。」

「遊びたい玩具を指さしたり、玩具を持ってきて「んーんー」と言ったりしています。」

＜担当者の所見及び助言＞

行動範囲がひろがって、動き回るという記録が多く見られた。特に思いどおりにならないと座り込むということに対しては自己主張の現れで、成長過程の中で必要なこと、そして、おじいちゃん、おばあちゃんとの別れで寂しさを感じて大泣きしたということに対しては情緒面のひろがりや本児の成長が見られることを保護者に助言した。さらに指さし行動が以前より増えており、本児の関心が広まっていることが窺える。

10) 平成14年2月16日～3月19日（1歳4ヶ月～1歳5ヶ月）

＜保護者の記録＞

「自分で好きな玩具を私たちのところへ持ってきて一緒に遊びます。」

「今日は積み木で遊びました。自分で積み上げ、1つ積みごとに「アー」と言いながら手をたたいています。私が積み上げるとそれをくずして喜んでます。」

＜担当者の所見及び助言＞

本児の情緒面の成長を窺わせる記録が多く見られた。前者については一緒にあそぼうという気持ちが出ているとい

うこと、この遊びが出来たときはたくさんほめてあげた方がよいことを助言した。後者については、空間を知るためにも大切なことであり、いろいろな並べ方、積み方を見せてあげ、やらせてあげてほしいと助言した。このやりとりこそがお互いの場の共有、そして通じ合うためのコミュニケーションにつながっていくものと思われる。

5. 全体考察

① 新生児聴覚検査で聴覚障害と診断された後の本児及び保護者に対する対応

新生児における聴覚検査で聴覚障害かどうかの診断が可能になったが、その後の教育相談における担当者の対応も、子どもの今後の成長を考える上で重要な要素となってくる。この事例でも初回の教育相談で見られたが、保護者が教育相談担当者にまず相談することは「どのくらいの聴力なのでしょうか。」であった。似たような他の事例では、「全くきこえていないのでしょうか。」「少しはきこえているのでしょうか」と尋ねられることもあり、さらには「全くお話ができないのでしょうか」に行き着くこともある。これは針谷・田中・森田 (2001) ²⁾ が指摘するように、新生児聴覚検査における検査結果における数値の解釈の仕方などが明確に説明されないことで、保護者における聴覚障害への不安が拡大することにつながるものと思われる。この場合、聴覚障害という状況が保護者にとって明確に認識されないということは、検査結果が保護者に適切に報告されていないという意味ではない。通常、検査を担当した医師は新生児聴覚スクリーニングであるAABRの結果を基にさらにABRなどの精密検査を経て、保護者に対して100dBで反応がなかったというように具体的な数値で検査結果を説明するが、その数値の意味が保護者にとって理解できないということである。保護者の多くは聴覚障害に関しては全く初めてであることから障害の状況・程度を把握することが難しい。そこで、今回の事例については、聴覚の評価において保護者に立ち会ってもらい、実際に音をきかせながら、「今出ている音が何dBでお子さんはこの音には反応していますよ」というように説明を行った。さらには、聴覚障害について、発達の可能性、コミュニケーション、補聴器などの補助機器に関する説明を行った。

新生児聴覚検査後の対応としては、まず聴覚の評価の結果を保護者と担当者でお互いに確認し、その後聴覚障害に関すること及び発達に関することについて理解しておくことは重要であると思われる。

② 乳児期の聴覚の評価

通常、乳児期の聴覚の評価は音に対する聴性行動反応を

担当者が読みとる形を取り、その多くは音（注：スピーカから出るウォーブルトーン）がきこえたら振り向く、音源を探すといった行動が反応の指標とされていた。今回の事例においては、振り向く、音源を探すというような反応のみではなく、音がきこえると眉毛を動かす、眉間にしわがよる、顔をしかめるというような顔の表情、本児を抱いている母親（または父親）の顔を見上げる、動作をやめる、「あれー」というような表情でいつもと何かが違うというような仕草を見せるというような反応を示すことも多く見られた。これは、田中・進藤 (1978) ⁶⁾ が提唱する乳児の聴覚発達チェック項目にも現れており、音刺激に対する反応の多様性を裏付けるものである。本事例では、聴覚の評価において担当者ら2人が同席して行うか、顔の表情を録画し、保護者と担当者で確認し合い、さらに保護者から本児の音刺激に対する反応（聴性行動）をどのように見るか、聴覚の評価場面だけでなく日常生活においてどのような反応があるかを示唆してもらい、聴力が何dBかの評価を行った。乳児期においてはきこえたら反応ボタンを押す、手をあげるなどの音刺激に対する自発的な行動は出現しないことから、聴覚の評価において、いかに対象児の反応を読みとるかが大きな要因となってくる。

さらに、音刺激に対する反応が見られた時、担当者の方からフィードバック（例えば、「きこえたね」・「できたね」という意味の報酬を視覚的な玩具の動きで与えること）を与えることも重要な要因となる。本事例においては、10ヶ月までCORの手法を用いて、聴覚の評価を行った。これは、最初、音刺激と同時にないしは少し遅れて視覚刺激（ここでは玩具と回転灯）を呈示する。これに対しての反応が見られると同時に音刺激及び視覚刺激を消すというような条件付けを行うものであるが、反応を持続させるためにも、反応が見られた後でもフィードバックとして視覚刺激を呈示するものである。そのフィードバックを与えられることによって、本児ははじめて音がきこえたことを確認できる。

11ヶ月時から、聴覚の評価場面において落ち着いて座っていられるようになってきたため、Play Audiometry（遊戯聴力検査）の方法で行った。これは音の呈示方法はCORと同じスピーカからウォーブルトーンを呈示するものであるが、音がきこえるとボタンを押す、そこで玩具が動きフィードバックを与えるというものである。この場合、音が呈示されていないときボタンを押しても玩具は動かない仕掛けになっている。

③ 補聴器のフィッティングと活用

聴覚障害と診断された時点で保護者は本児に対する補聴器の装用を希望していた。しかし、初めて来所した時点（出

生後5ヶ月)で、完全に首がすわっておらず、座位が安定していなかったことから補聴器の本格的な装用は6ヶ月時から行った。その場合でも、廣田(2001)³⁾が述べるように1歳未満の乳児にあつては耳介軟骨部が柔らかいため、イヤモールドが脱落しやすく、かつ耳かけ形補聴器においては補聴器本体が脱落しやすいことから、従来の耳かけ形補聴器を外部イヤホン方式にし、補聴器本体を肩に装着させるベビー形補聴器を装用した。また、補聴器を通して音がきこえるようになるとはいえ、補聴器を装用することは乳児にとって異物を装着させることと同じである。本事例においても、保護者の記録によれば、最初は5分以内で自ら外してしまうことが多く、保護者が焦りを感じているような記録が見られた。担当者の方からは、本児が何かに夢中になっている時(例えば、玩具で遊んでいる、テレビを見ている)を見計らって行く、最初は5分以内で補聴器を外してしまうことが多いが、外してしまってもかまわないことを助言した。さらに、保護者が、我が子の補聴器を通したきこえを確かめたいばかりに、盛んに大声でよびかける場面が見られたが、このことについては以下のように助言した。すなわち、本事例のような先天性の聴覚障害のある乳児にあつては、出生後、きこえの体験をほとんどしておらず、補聴器の装用をして初めて音のきこえを体験することになる。その際、乳児が音に対して何か関心を示した時に音というものに保護者が共感できるような状況が必要である。またできる限り保護者とともに「音の存在」に気づくように環境作りを行うことも重要である。

④保護者と子どもとの関係作り

本事例において、補聴器及び呼びかけの反応に関する記録が見られるように、当初、補聴器を初めて装用させたあと、保護者が補聴器を通して本児とのコミュニケーションがとれるかどうか不安を募らせているところが多く見られた。このことは、障害のある子どもを持った保護者によく見られることであるが、障害克服のための教育を意識するあまりにコミュニケーションの出発点となる人間の愛着・共感・信頼関係を無視しがちである(金山, 2002)⁴⁾。ここで、担当者からは、音声言語でやりとりすることにこだわらないこと、障害の状況を子どもとともに受容すること、「場の共有・共感」を図ることを助言した。すなわち、本事例においては、当初保護者が本児のきこえを確かめたいばかりに大声をはりあげるところが見られたが、まずは一緒にあそびながら「場の共有」をはかり、コミュニケーションは音声だけでなく視線をあわせること、スキンシップをはかることなどで「通じ合うこと」から始めるように助言した。このことは、その後の保護者の記録によく現れている。また、担当者としても Baguley, Davis, and Bamford

(2002)¹⁾が示唆するように記録などを通して保護者との意志疎通を図ること、保護者と子どもとのやりとりに関して保護者が理解しやすい表現で助言を行うことが必要とされる。

⑤子どもの全体の発達に関する対応

本事例では、出生時のアプガー値が低かったため、重複障害の可能性も指摘されていた。そのため、聴覚的な援助だけでなく、子どもの全体の発達についても援助が必要とされた。そのため、本児の発達については「発達の気がかりな乳幼児の早期発達診断」(川村・志田, 1982)⁵⁾を用いて毎回相談後にチェックし、発達の様相を確認した。この診断検査は、誕生から3歳未満の乳幼児を対象とし、発達水準を月・年齢によってI~IXの9つに分けてある。発達の原動力となる活動(主導的活動)が「情意」「移動」「手行為」「言語」「生活習慣」の分野から構成され、全体で324の主導的活動の項目が示されている。

事例の経過でも述べたように本児の運動面での発達は順調であったが、言語面特に発語については、ゆっくりしていることが観察された。早期発達診断検査の「移動」(図6)、「言語」(図7)の発達プロフィールからもその実態は明らかである。本稿では1歳5ヶ月までの本児の成長をおっているため、図では発達水準VI(生後1歳6ヶ月)までの発達プロフィールを示した。図中の項目(例えば、「C2頭部保持の拡大」)は主導的活動を示し、活動の下に記載したカッコ内の数字は、本児がこの活動に含まれている項目に到達した月数である。

聴覚に障害があるとわかった時点から医療・療育関係者は、聴覚を中心に援助していくことが多い。しかしながら、子どもの発達を考えた場合、聴覚はその一部であり、対象とする子どもが幼ければ幼いほど、運動面や情緒面など全体的な発達を評価しながら援助していくことが重要である。本事例は生後5ヶ月から担当したため、全体の発達に関しては運動面の指標を中心に観察した。上述したように結果として運動面での発達はほぼ平均的であり、重複障害があるとは今のところ考えていない。しかし、言語面での遅れは見られ、理解に比べ発音や表現語彙の発達が遅い。これは、聴覚障害による要因と思われるが、今後の成長に伴い、概念や複雑な話の理解などの観察を継続していくことが必要とされよう。

保護者にとって待ち望んで誕生した我が子に聴覚障害があると伝えられた時点で、保護者は我が子の「きこえ」に関心を持ち始める。すなわち、「きこえているのか、いないのか」「きこえているとしたら、どのくらいきこえているのか」「どのようにしたらきこえやすくなるのか」などの思いである。「はやく何とかしなければ」という不安が先行してしまい、「首がすわった」「笑った」「声を出した」というよ

() 内の数字は到達した月数

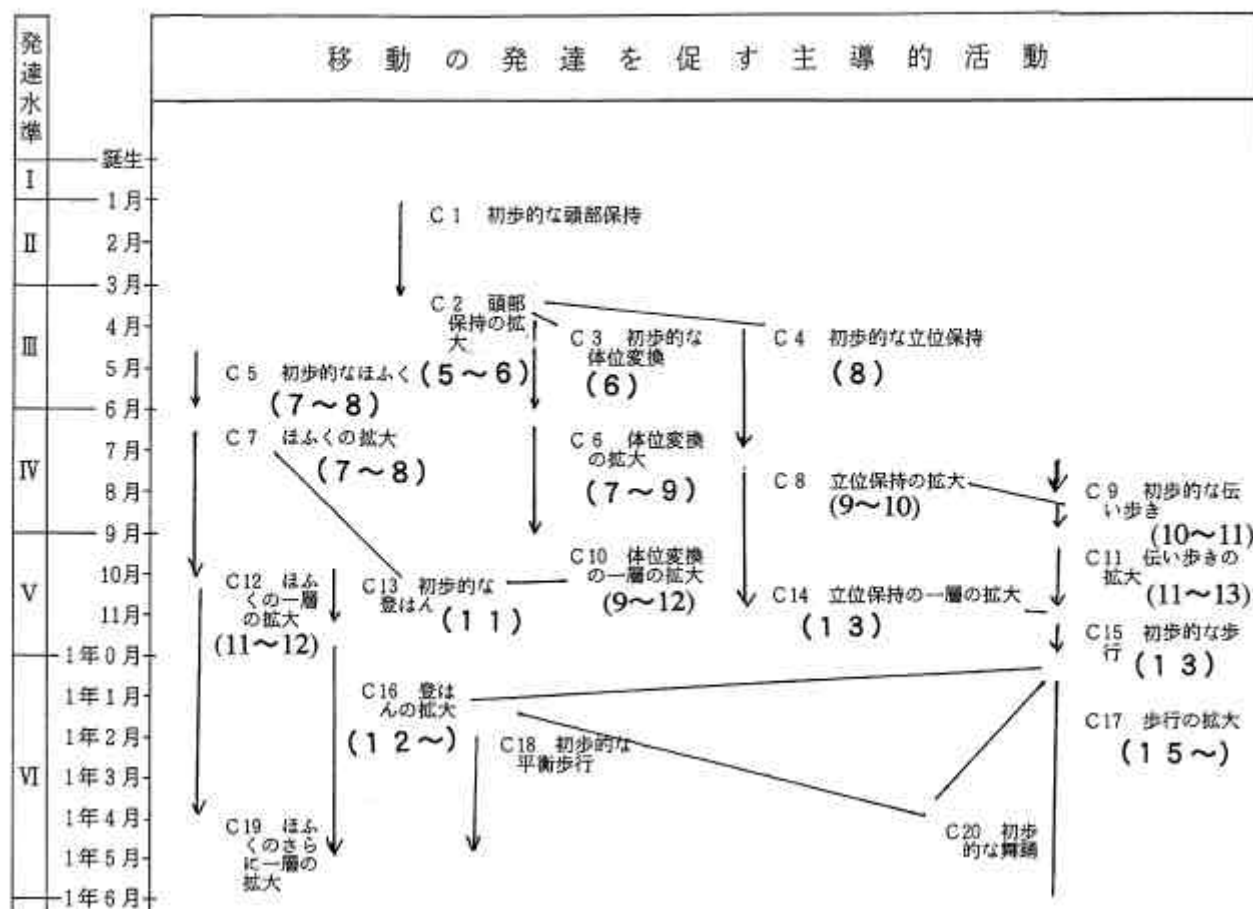


図6 「移動」の発達プロフィール

うな子どもの成長の一つ一つを素直に喜ばないのではないのだろうか。本事例の経緯においても同様のことが見られ、担当者としては、聴覚障害に関する具体的な情報を提供するとともに、まずは通常の「子育て」が重要であることを強調した。この対応における保護者の意識の変遷は今回の保護者の記録から知ることができる。

一般に子どもが生まれることによってその家族は試行錯誤しながら養育体制を整えていく。従って乳児を抱える家族は不安定な状況にあることが多い。その上、子どもに何らかの障害があるとされると、その子どもの将来の見通しも立ちにくくなり、家族内の養育体制が混沌としたものになる可能性が大きい。医療技術などの進歩により早期に障害が発見されるようになってきたが、これらの点を踏まえながら、早期からの発達の援助はさらに検討を重ねる必要があるものと思われる。

6. おわりに

本報告では、新生児聴覚検査によって聴覚障害と診断さ

れた1事例を通じて、早期からの聴覚的、発達の及び保護者援助について検討した。

まず、聴覚的援助については、子どもの多様な聴覚行動の見方を含めた聴覚の評価、その結果及び発達に応じた補聴器の形の選択を考慮した補聴器のフィッティング、「音の存在」に気づかせることから始まる補聴器の活用が考えられる。2番目に発達の援助については、聴覚の評価に留まらず、遊び、歩行などの運動面、指さし、物に対する好奇心や対人関係などの行動面を含めた全体の発達の評価及び助言が考えられる。3番目に保護者援助については、上記2つの援助を受けて、評価の結果の共通理解、子どもとのやりとり、子どもとのコミュニケーション、子どもの行動の見方に関する助言が取り上げられる。

今回は、1事例を通じて行ったが、今後は様々な事例を通じて検討を重ねていきたい。

注1. 通常用いられている聴覚検査とは、聴覚障害または難聴と診断することを目的とするものである。使用機器、手続きは同一のものであるが、本稿では教育的観察及び教育相談の指

() 内の数字は到達した月数

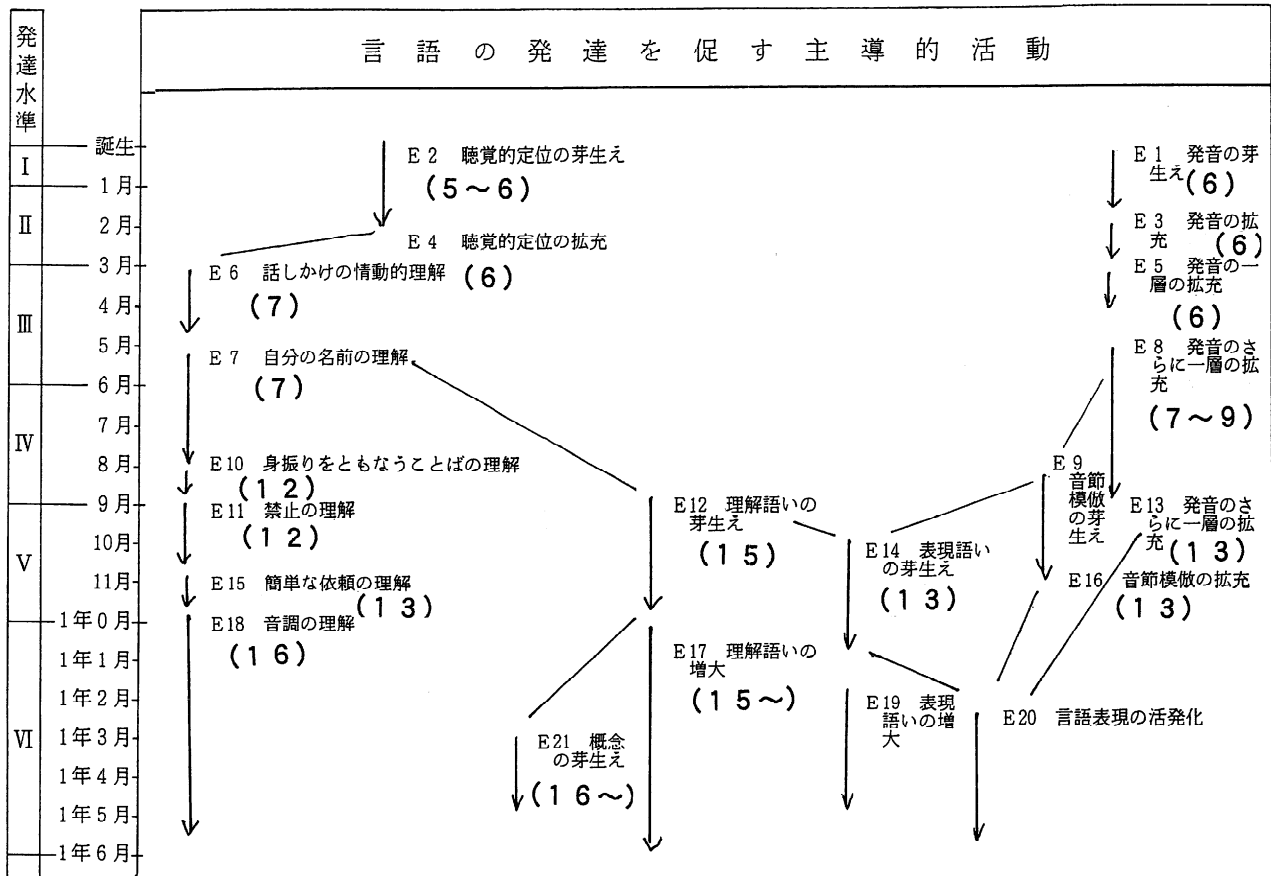


図7 「言語」の発達プロフィール

標することを目的としたので聴覚の評価という言葉を用いた。

注2. 新生児の出生後1分における状態を表す点数法で、皮膚の色、心拍数、反射興奮性、筋緊張、呼吸努力の5項目について評価される。これは、医師が新生児に対して蘇生術を施すかどうかを判断するために役立てられるものであり、10点満点で7~10点については蘇生術の必要なし、4~6点についてはある程度の蘇生術が、0~3点では人工換気が必要となってくる（南山堂：医学大辞典より）

謝辞：本事例の掲載に快く了解して下さった本児と保護者に心から感謝致します。

本報告を進めるにあたって、平成14年度科学研究費補助金基盤研究 (C) (課題番号: 14510327) の助成を受けた。

文 献

1) Baguley, D. Davis, A. and Bamford, J : Principles of

family-friendly hearing services for children. British Society of Audiology Newsletter, 29, 35-39, 2002.

2) 針谷しげ子・田中美郷・森田訓子：新生児聴覚スクリーニングで「refer」となった児の親の心理について。Audiology Japan, 44, 5, 279-280, 2001.

3) 廣田栄子：幼小児に補聴器を適合する時の方法を教えて下さい。神崎仁・安野友博・古賀慶次郎編：補聴器Q & A より良いフィッティングのために。金原出版, 2001.

4) 金山千代子：母親法 聴覚に障害がある子どもの早期教育。ぶどう社, 2002.

5) 川村秀忠・志田倫代：発達の気がかりな乳幼児の早期発達診断。川島書店, 1982.

6) 田中美郷・進藤美津子：乳児の聴覚的発達検査とその臨床および難聴児早期スクリーニングへの応用, Audiology Japan, 2152-71, 1978.

Early Intervention for an Infant with a Hearing Impairment

-Support in the First Sixteen Months-

SATO D. S. Masayuki , KOBAYASHI Michiyo and TERASAKI Masako*

(Department of Education for Children with Speech and Hearing Handicaps)

(*Odawara City Hospital)

This paper reports on an individual case of early intervention for an infant with a hearing impairment. The subject is a baby girl who was diagnosed as hearing impaired by Universal Neonatal Hearing Screening (UNHS). We provided the early intervention program for the subject and her parents on educational guidance and counseling. Three areas of support were discussed: First, audiological support, which included the observation of various audiological behaviors, the appropriate fitting and usage of hearing aids and guidance for auditory

learning in daily life. Second, developmental support, which included the observation of various physical activities and emotional conditions. Finally, on the support for her parents, it was suggested that the provision of guidance on understanding hearing impairment, interaction and communication between infant and parents, and health care were the major considerations.

Key Words : Universal Neonatal Hearing Screening, infant, hearing impairment